

随想

人が変わる喜び

黒岩重吾〈作家〉

絵中西 勝



私が最初に海外旅行に出掛けたのは、昭和三十
年代の後半である。当時は香港を中心に東南アジ
アを廻っていた。その当時の香港、東南アジアは
ひっそりとした感じで、現在のように日本人の旅
行客が押し掛けていなかった。そういう点で充分

に旅情を満喫することが出来た。

私が最初に香港を訪れたのは昭和三十九年で、
同行者は集英社の編集者M氏であった。

当時、九龍側のカスバ九龍城はまだ健在で、暗
黒街の真価を発揮し、警察も手がつけられなかっ

た。

だが、かつて釜ヶ崎に住んでいた私は、こういうカスバを訪れるのが大好きである。中国人のガイドは、危険だから入らないで欲しい、と必死になって止めたが、私はガイドの忠告を無視した。香港に来た第一の目的は九龍城を訪れることだったからである。

九龍城が危険な場所であることは承知していたが、私には何故か、絶対危害を加えられない、という自信があった。

ガイドは入らない、というので、私とM氏だけが見学することにした。M氏もかなり悲壮な思いだっただろう。

最も危険なのは、九龍城は迷路のようになっており、道に迷うと、なかなか出られないことである。余りうろろしているとなかなか進められず、金銭から着ているものまで盗られる、という。

私はカメラをガイドに預け、すたすたと歩いて行った。崩れ落ちそうな古い石造りの家が狭い道の両側に並んでいて、陽当りが悪い。

下水の排水が悪く露路のような道は、泥水を含んでいて、歩くと音を立てる。

石造りの家の一階には、殆どドアがなかった。

部屋の中は薄暗く、眼を凝らさなければ、識別出来ない。だが歩いているうちに薄暗さに慣れ、内部が見えるようになった。

痩せた裸の老人が阿片を喫っていたり、椅子に坐った半裸の女が股を開いて私達を呼び込む。年齢不詳の女達だった。下水の匂いが鼻をつき息苦しい。時々、黒いズボンに、よれよれのシャツを着た若い中国人達と行き合った。確かに彼等の眼

付きは異常だった。

何のためにやって来たのか、ととげのある視線を私達に浴びせる。石の部屋に引張り込まれたなら、それで終りである。

隙を見せたらまずいので、そんな時、私はM氏に話し掛け、平然と彼等の視線を受けた。ただ彼等に犯行のきっかけを掴ませないために、道だけは譲った。

道が狭いので、一度、そういう連中の一人と肩を触れてしまった。

私は直ぐ、チュープチ、チュープチと謝った。

私の謝罪が余りにも早かったせいか、彼は私を睨みただけで、襲い掛っては来なかった。

辻を曲る時、私は左、と自分に呟いた。次の辻の場合は、右、と呟いた。つまり、私は左、右、左、右の順序で歩いたのである。

だが、なかなか出口に出ない。全くの迷路である。或る部屋の前まで来た時、私達は中から呼ばれた。見ると中年の男が、阿片吸引具を持って手招いている。

「テン、ダラー」

と彼はいった。

彼の傍には、全裸の女が横たわっていた。

これまで私は九龍城の住人から声を掛けられたことがなかった。声を掛けられないのも無気味だが、実際に声を掛けられると、押えていた恐怖心が頭を持ち上げた。

「アイ、アム、ソリー、ノー、マネー」

と私は答え、慌てて引き返した。

次の辻を曲る時、振り返ってみると、ランニングシャツ一枚の男は阿片をくゆらしながら、道路

まで出て、私達を眺めていた。

幸い、右、左の順序で来たので、私達は迷うことなく無事九龍城を出られたのだった。

中国人のガイドは、自分が案内した日本人で、勝手に九龍城に入ったのは、あなた達だけだ、と感嘆した。

M氏は今でも、その時のことを思い出しては、本当に死ぬ思いだった、といっている。

二度目に香港を訪れたのは、昭和四十五年だったが、その時はすでに九龍城の半分は壊され、住人のための新しいアパートが建っていた。

最初の香港旅行では、もう一つ思い出がある。その翌日、私達は九龍側のダンスホールに行った。ダンスホールといっても、お茶が出るだけで、女性と遊ぶための店である。

私達が入ったのは、三流のダンスホールだった。私の傍にいたのは、色白の華奢な女性だった。美人ではないが、三流ダンスホールには勿体ない女性だった。名前は忘れたが、私は金を払い、彼女を連れ出したのだ。

真面目なM氏はこういうところの女性とは遊ばない。だがM氏は私の身を心配して彼女のアパートの傍まで付いて来てくれた。

私はアパートを見て、少し気持ち悪くなった。九龍城の石の建物のように、今にも崩れそうな古びたアパートだった。そんなアパートが固まりあって建っている。

だが私は彼女の白い歯を見て、決心を固め、石の階段を上った。電灯が階段についていない。僅かな月明りを頼りに、四階まで上った。彼女は時々、踊り場に立ち、恐る恐る上って来る私を待つ

てくれた。

彼女の部屋はワンルームで、古びたベットと、壊れそうな椅子、テーブル、安物の洋服箆笥などがあった。驚いたことに、壁に掛けてあったポスターは、日本の映画俳優のものだった。ただ、窓からの眺望は素晴らしい。

香港島の灯群れが一望の許に眺められた。

私と彼女は部屋でコニャックを飲んだ。私は彼女が要求した金額の倍近くの金を払った。そして、これで総てだ、と空になった財布を見せた。余分の金はズボンに作った隠しポケットに入れてあった。

彼女は片言の日本語と英語を喋る。

私は彼女が少女時代に、両親と共に、中国本土から香港に逃げて来たことを知った。

両親は数年前に亡くなり、現在、彼女は一人で働いて生きている、という。

多分、私は、彼女の話を疑いながら聴いていたのだろう。そんな私の気持ちを見抜いたのか、彼女は金象嵌の銘文のある香炉を箆笥から取り出した。代々家に伝わったもので、家の宝だった、と私に告げた。

値打ちは分らないが、中国の古い名門氏族が持っているような気品があった。そういえば彼女の指は細くて長い。私は何となく彼女の指に名門氏族の血を感じた。

十一時頃、私は彼女に送られて暗い階段を下りた。

M氏の姿が見えない。こんな時刻なのに、食糧品店が店をあけていた。

彼女はその店に入ると、バナナを買った。私に

プレゼントだ、と差し出す。私は喜んでバナナのプレゼントを受けた。

その時、M氏がガイドとやって来た。

M氏は私を待っていたらしいが、なかなか出て来ないので、ガイドを呼びに行き、戻って来たところだ、という。実際M氏は息を切らしていた。あれから、もう十五年以上の歳月が流れたが、

あの時のバナナの重みは、今でも記憶にある。東南アジアの旅を終えると、私はヨーロッパに出掛けるようになった。昭和四十年頃からだ。

最初のヨーロッパ旅行は、ルポライターのS氏と出掛けた。コペンハーゲンからアムステルダムまで飛行機を利用し、コペンハーゲンからはヨーロッパ特急に乗った。

一等のコンパートメントは四人乗れる。偶然、若い日本女性と同じコンパートメントだった。話し合ってみると彼女は、日本の大学を出て、ドイツの大学に学ぶため来た、という。私は片言の英語を喋れるが、ドイツ語は全く駄目だった。ビールを飲み良い気持になった私は、彼女に、一つだけドイツ語で歌を歌える、といった。

彼女が歌ってみて欲しい、といったので、私は歌った。ポーラ・ネブン主演の「夜のタンゴ」の主題歌である。学生時代映画を観、感激してレコードを買った。だから学生時代から、この歌だけは歌えたのである。

彼女は熱心に耳を傾けて聴いていた。私が歌い終ると拍手してくれた。



「この意味、分った？」

と私は訊いた。

彼女は笑いながら首を横に振った。私のドイツ語の歌は、彼女に全く通じなかったのである。

数年たって、フランクフルトのレストランで、

私はアコーディオン弾きと歌手に、「夜のタンゴ」をリクエストした。

歌手は哀愁の籠った声で歌ってくれた。歌手の歌を聴きながら、私は、私の歌が彼女に通じなかった理由が分った。私はのぼして歌う言葉をのぼさず、のぼさないで良い言葉を勝手にのぼして歌っていたのである。これでは、通じないのも当然である。

この十年間、ヨーロッパに行くと、私は日本人が行かない場所を好んで歩いた。そのため危険な目に遭遇したこともあった。

だが、たんに観光名所だけを歩いていても意味はない。勿論観光名所には、それぞれの歴史が息づいている。だから、観光名所を見学する時は、前もって、その場所や人物の歴史を徹底的に研究しておくべきだろう。

たんにガイドブックを頼りに行くよりも、研究しておいた方が、ずっと感動が深い。

ヨーロッパでは、比較的デンマークが好きである。デンマークについては、これまで、小説や随筆に書いて来ている。

ヴァイキングの子孫であるデンマーク人は、比較のおおらかである。この頃は犯罪も多くなり、コペンハーゲンなど、麻薬基地の一つにされている。それでも、コペンハーゲンの街を歩くと、私はのんびりした気持になる。パリのように汚なく

ないし、ローマのように搔っ払いに気を配る必要もない。

三年前、コペンハーゲンに行った時、私は港の傍のヒッピー村を訪れた。そこには世界各国のヒッピー達が集まっている。

彼等の中では、昼、仕事をしている者も多いという。それにしても、日本では考えられないことである。

ヒッピー村を歩いていると、陽焼けた日本人のヒッピーと会った。作家の取材根性で、私は早速、日本語で話し掛けた。

だが相手は笑いながら首を横に振った。日本人と思ったが彼はエスキモーだった。

「日本人と、良く間違えられる」と彼は親しみの籠った眼で私を見た。

コペンハーゲンのヒッピー村が、現在も存在しているかどうか、私は知らない。

ただヒッピー村でありついた食事だけは、お世辞にも旨い、といえなかった。

海外旅行をしていると、色々な出会いがある。それには矢張り、思い切って相手にぶつかってみることが必要であろう。

私は少年時代から、人見知りする方で、見知らぬ人に声を掛けたりしない。

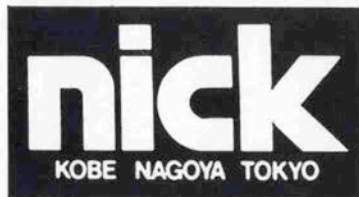
だが不思議なことに、日本を離れると、平気で声を掛けることが出来る。

自分でも人格が変わったのではないか、と呆れるほどである。

しかし、考えてみると、海外旅行の魅力は、そういうところにあるのかもしれない。

こうべにふれあいのディテールを

心の通う店創り



神戸日建

商業施設全般・調査企画・店舗装備・設計施工

株式会社 神戸日建

本社(設計室) 神戸市中央区御幸通3丁目2-20
PHONE (078) 252-1321(代)
神戸事業部 PHONE (078) 251-3525(代)
名古屋事業部 PHONE (052) 561-3618
東京事業部 PHONE (03) 278-1369

ハイセンスな紳士服で
最高のおしゃれを



三恵洋服店

神戸・元町4丁目 ☎(078) 341-7290

■私の旅日記

外国みやげ

音と匂い

鴨居 羊子

〈デザイナー〉



右：ブズーキに合わせてゾルパダンスを少年達は踊る。左：ヘラクリオンの宿の近くのろぼと私

外国の旅に出たら、その国の音と匂いをおみやげにもって帰るのが一ばんいいな／＼と当り前のことなのに、あるとき、悟った／＼と自分で手を叩いた。

といっても、パリへいったら最高の歌手のシャンソンのレコードと、香水なら世界一のジャンパトのジョイとかミル——なんてことを言っているのではない。それこそ当り前で、そのレコードは日本にもきてるだろうし、香水なんて、少し高いが日本にズラリと世界のものが並んでいる。

ある日「ロシアの香水よ」といって友達からもらった香水と比べてはどうだろう。十センチ立方の真四角な箱に大ゲサにクレムリン宮殿がプリントされていて、あけてみたら、もっさりした醤油びんみたいな異様なびんに飴色のサラダ油のような色の香水が入っている。「向うの人間は体臭がきつから、とりあえず匂い消しのためつける香水よ。みんなこんなものケイベツして、いらないうて言うんだけどあなたはどう？」と友達は言った。私は目を輝やかせています、いりますとおしいたいて香水をもらった。ロシアの太ったマダムが、毎朝、服を着る前に、それも働くエプロン姿の奥に、これをすりこむところを想像し、すがすがしい生活の匂いがただよっ

てくるようであった。

ギリシアのクレタ島に遊んだときは、どんなオンボロ車も小さいプレーヤーがギリシア音楽のブズーキを奏でていた。いい音色だなあーと思うとすかさず運ちゃんに「それ何という曲？」と名前を聞き、あとでレコードを買いに行く。知り合った少年達が、ある日小さい車でヘラクリオンの町をドライブしてくれた。

やっぱりプレーヤーから悲しげなブズーキが流れていた。それは輝やかしいかたて榮えたギリシアの昔の文明を偲び、讃え、「昔を今になすよしもがな」と渴望している風にも聞えた。白い土壁の家と家の合間からびっくりするほど青緑色のエーゲ海の色がとびこんでくる。少年達は、サガボー（汝を愛す）の歌をレコードに合わせて、一せいに歌い出した。坂道が多いので、上り坂になると、レコードは急にゼンマイのゆるんだようなスローな音になる。助手席の少年は、あわてて、ゼンマイをまくようにプレーヤーを直す。曲の音色と、少年達の歌声が、奇妙に悲しくあでやかに、クレタ島にひびいていった。

私は旅行カバンに、もちろんたくさんさんのブズーキのレコード（日本には一枚もない）をつめこんで帰日した。

私の旅日記

道東旅日記

妻への免罪符

奥村 孝

(弁護士)

七月某日(土曜日)

午前八時出発大阪空港までひと走り、駐車場に車をいれて千歳空港までDCC10、飛行時間一〇〇分、釧路行DCC9に乗り換える。待ち時間九〇分飛行時間四〇分、自宅から釧路空港まで約五時間である。大阪空港を発する時釧路行きは霧のため欠航の虞れありと注意を受けたが釧路は快晴である。頼んでいたレンタカーが空港に用意されており直に丹頂鶴自然公園に行く。

ここ数年一回の休暇旅行を妻と楽しむことにしている。車が好きでハンドルを握れば乗物酔を決してしないという妻と飛行機で飛びレンタカーで廻るという旅を思い立ってから南九州・長崎熊本・東北諸県と二泊三日の旅行が続いている。こんな旅が妻への免罪符となれば安いものである。

原野に朱色の冠を持つ鶴が放し飼いされている光景に神戸から僅か五時間で接する。丹頂鶴と別れて国道二四〇号線を一路北上、両側は原野が放牧場で殆んど集落はなく広い北海道に驚きながら阿寒湖を眺めアイヌ村で買物をし、美幌峠で屈斜路湖を望みそこで反転して霧の摩周湖に着く。霧が左から右に流れて行く様子を展望台から満喫し川湯温泉に泊る。本日の走行一六〇キロ。

七月某日(日曜日)

川湯温泉を出て藻琴村を経て斜



美幌峠より屈斜路湖を望む

里に向う。

沿道これまた原野、途中あちこちの原生花園を見る。エゾスカシユリ・ハマナスそして名の判らぬかわいい花々。ウトロで昼食、お店の人がトキ魚と教えてくれた舌にとろけそうな美味のお刺身に又々驚き、更に知床林道を進みカムイワツカの滝に至る。これ以上は車は行けないので引き返し知床五湖を散策する。入口に知床憲章の看板があり「知床の原始的自然をみんなで愛しあおう」と記されており私たち都会人に教訓を与えている。日曜日というのに遊覧客は少く水と緑と静けさを堪能する。近くの岩尾別温泉に泊る。一軒しかない旅館は「ホテル地の涯」という。地の涯の名にふさわしい環境である。本日の走行一五〇キロ。

七月某日(月曜日)

ホテル地の涯を出発斜里町を経て湧湖・網走湖・能取湖を横に見ながらサロマ湖に行きつき、オホーツク海の薫りを十二分に吸う。昼食後網走に戻り折角の機会なので網走刑務所の入口で記念写真を撮り女満別空港でレンタカーと別れる。本日の走行二〇〇キロ。

午後三時女満別空港発YS11、千歳でトライスターに乗り換え大阪空港に午後七時三〇分到着。六〇時間振りに喧騒の神戸の街に帰り、自然を求めた駆け足旅行終る。

■私の旅日記

マイペースで 旅に慣れる

朝比奈千足

〈音楽家〉

ヨーロッパへの演奏旅行という旅を、私は幾度か経験しているが、これははっきりした目的（つまりコンサートをするという）があつて、しかも決められた日時に所定の場所にどうしても到着してなければならぬというキビシイ条件がある。かなりの緊張感と拘束感をいつもながら要求される。かと言ってこれが私にとって苦痛かと言われれば、実はそうでもないのだ。もともと私は旅好きでもあつ

てこんな仕事の旅でも結構楽しんでる。

旅を充実させる事、それは私の場合演奏会を成功させかつその土地の人物や風物によく馴じむことだと心得ている。その為には、なるべく旅に疲れないように、日本にいる時の習慣をあまり大きく変えないように気を付けている。なにも枕を持って歩くという意味ではない。旅行にはホテル生活がつきものだが、ましてや海外でのホテルでは日本での普段の生活とはかけ離れていて何かと不便で気に入らぬことが多い。でも余計な神経を使って自分の大切な仕事に差障えてはいけぬ。そこでホテルの部屋をできるだけ私の気に入るように模様替えを試みる。場合によってはベットまで動かす。机やいすはもう思いのままだ。次の日にベットメイキングのおばさんが

この部屋が「自分の」部屋になる。仕事が済んで自分の家へ帰るという感じがしてとてもくつろぐ。

次は食事のことだ。目的地に着くとまずスーパーマーケットを探しておく。幸い私には食べ物に好き嫌いが少ないので、ヨーロッパの日常の食事はだいたい平気だ。それでも日本にいる時はそう毎日レストランに行つて御馳走を食べている訳はないので、毎日毎食ホテルのグリルではいくらかタフな私の胃袋もまいってしまう。スーパーでパンやハム、チーズ、いろいろなサラダ、果物そしてビールやワインを買いこむ。「自分の」部屋で自分の口に合ったものをリラックスして食べる。しかも新鮮なものを安く手軽に食べられたと思うと元気が出てくる……旅慣れるということはこうやって自分のペースを作りそれを守っていくことだ。

私は観光やショッピングがニガ手だ。もっと違った旅行の楽しみ方があつてもいいと思う。変つた事と言えば私はよく音楽家の仲間と彼等の自宅へ招待される。仕事の場での表情とは別の一面が見られる。しかもその人の生活の様子がうかがわれて興味深い。お別れの時にはもう十年來の友人のようになつてしまふ。旅のおみやげに私はこのような人とのふれあひを持つて帰ることにしている。

ボストンのレストラン（魚料理専門店）で
エビ一匹と真鯛に（？）格闘中の筆者



■私の旅日記

生来の旺盛なる 好奇心を発揮

佐藤 早苗

〈フリーライター〉

私の旅はいつもあわただしい。どんなにゆとりを持たせて日程を組んでみても、結局はあたふたと心残りのまま帰って来る。

今度こそは遊びの旅をしようと思いついて日本を出発しても、いつの間にか取材根性が頭をもたげてきておちつかないものである。仕事熱心というよりは生来の好奇心と、おっちょこちょいのなせる業で、それに、世の中にはほん



オアフ島のマカプーの丘でハンググライダーを楽しむ女性に早速インタビュー

かっ て飛 び立 つ、 気が 遠く なる よう な恐 怖の 一瞬 だが それ

とうに不思議なことや、驚くことが沢山あるのだから仕方がない。この写真はオアフ島のマカプーの丘で、ウサギ島がすぐ眼下に浮かんで見えるところ。

いっしょに写っている女性はそのときハンググライダーで空中飛遊を楽しんで、無事着地したばかりであり、早速インタビューにかけたところである。

彼女は博物館に勤務するごく普通の娘さんで、友達のパイロットがハンググライダーをやっているから私も始めたのだといとも簡単に云う。

危険率はグライダーやスカイダイビングよりはるかに高く、半年の間に十数人も墜落死しているというから命がけだ。

目もくらむような高い丘の飛出し台から一気に、まっ青な海に向

が彼女には何にもまさるエクスタシーなのだ。

「死」が背中に張りついた緊張感と、全身に風をはらみ、自然を見おろし、鳥になって空中を旋回するあの陶酔境は飛んだ者でなければ分からない、と彼女はまだ醒めやらぬ上ずった声で云うのである。

人間はレオナルド・ダ・ビンチの頃から鳥のように空を飛ぶことに挑戦した。だからヘリコプターもジェット機も生まれたわけだが、不思議なことに、鳥のように飛びたい、という欲望はまだ満たされてはいないらしい。

マカプーの丘に集まる鳥人族の常連は三十人ばかり、そのうち数人が女性である。

ハンググライダーをたんで車の上に積んで続々と丘に登って来る。友達に手伝ってもらってカラフルな羽を組み立てると、まるでプールの飛込台から飛びように躊躇なく踏み出していく。

なかには夫婦で無線機をたずさえて飛遊し、エクスタシーの中で語り合うという人達もいた。私はいついつ時を忘れて彼等の話にのめりこんでしまう。

せっかく地上の楽園にやって来たのに、またひと泳ぎも出来なかったなあ……などとぼやきながら、それでも結構満足して帰って来るのである。

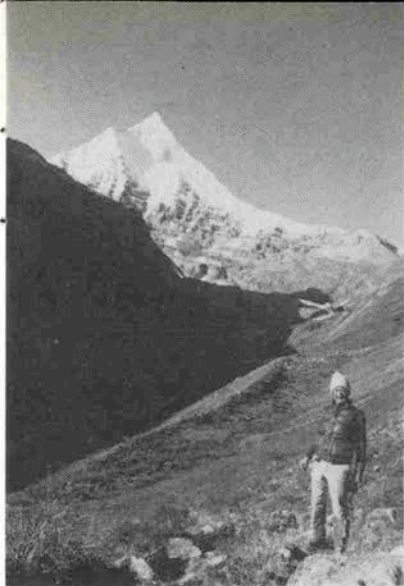
■ 私の旅日記

誇り高き

ブータンの人々

長 島 隆

(神戸地下街株副社長)



ツェリムカンを背にして標高4000mに立つ

面を、カモシカを横目に見ながらジグザグに登り雪のボンティ峠(四、七四〇m)に着く。ここから北面の山は雪の世界。コバルトブルーの

ドゥルック・ユル、竜の国、自らの国をそう呼んでいるヒマラヤの王国、ブータンの国境の町プンツォリンに入ったのは昨年(一九八〇年)の十月末の夕刻だった。最年少は寺本渥淡路屋社長、あとは五十、六十歳代の自称壮年ばかり。アテンダントは日本山岳会エベレスト隊員だった伊丹君。人手不足のブータンではトレッキングには人夫よりも馬が利用され、ガイド・コック・馬方などは国営旅行社(国王の妹に直屬)から派遣される。隊員九人、ガイドほか九人、馬二十二頭

が隊の総員でした。最近まで鎖国していたこの国で、初めて奥地のチベット国境地帯へトレッキングを許され、行く先々で外国人とは初対面の素朴な村人たちに親切に迎えられた。

第一日めはパロ溪谷ぞいに北上しグニチャワ(高度二、七八〇m以下同じ)陸軍の演習地に幕営。翌朝、実弾射撃の轟音に追いつてられるようにして馬の隊列は急峻な山腹を一挙に高度差一、〇〇〇m以上を急登、樹林帯を越えて草原のトンブラシヨ(四、一〇〇m)で幕営。ここは夏はヤクの放牧場になるところ。ヒマラヤンブルーの空に夕陽が落ちたあとは満天にこぼれんばかりの星。翌日、雪のタグルン峠(四、四〇〇m)、全山シャクナゲの群落に覆われた山を越え溪谷に下りソイヤクサ(三、七二五m)で幕営。どこで伝え聞いたのか薬を求めて男女がテントにやってくる。薬効は素晴らしいようだ。次の日、

青空のもと、足もとに二つの氷河湖、その向うにツェリムカン(二六、九三五m)の白銀の三角錐を望んで息をのんだ。静寂の世界に吸いこまれそうな二つの氷河湖を過ぎたところで、先頭のガイド、ニム

青年が手を挙げて隊列を制止した。彼の指さす右前方の斜面に一〇〇頭をこえるカモシカの大群が悠々と草を喰んでいる。距離は一〇〇m、日本の岳人仲間でも珍らしい貴重な写真を撮ることができた。この日、パロ溪谷の最奥シャコンタシ(四、〇〇〇m)で幕営。眼前の山の稜線はもうチベット国境だ。昼は摂氏二七度、夜は零下一度、しかし連日の快晴に恵まれながらトレッキングを続け、国王の誕生日に首都チンブプに入った。一夜ブータン政府ペムツェリン経済局長の宅へ招かれ、副大臣ほか三〇代の若手高級官僚と交歓、神戸にブータン友好協会を設立することに合意、この春に誕生した協会はポートピア・ブータン館の運営に大いに協力した。ここには書き切れぬエピソードを沢山もって一行はブータンを離れた。

丹前に似た手織りの着物に山刀、ラマ教を奉じ、もの静かで礼儀正しく、誇り高きブータンの人たちに幸せあれ、オンマニバドメフム!